

下商物語 (その五十七)

「吹奏楽部の思い出」

(九八二一九九四年)

中村 芳喜

わたしが下商に着任したのは昭和56年4月、28歳のときでした。以後14年間にわたってお世話になり、下商は私が「最も長く勤務し、最も印象深く、そして最も愛する高等学校」となりました。ちなみに公立高校退職前の2年間はお隣に勤務しましたが、14年間の習慣とはおそろしいもので、毎朝の原チャリ通勤で気が付くと下商の正門をくぐっており慌ててUターン……ということが何度もありました。

さて、当時の下商は学校中に沸き上がるようなエネルギーが渦巻いており、時には生徒指導で苦労することもありましたが、個性豊かな生徒たちとのドラマが展開されていました。こうした空気のもとで私も色々なことに挑戦し、たくさん失敗もしました。今回はその中から顧問・指揮者を務めた吹奏楽部のことを書かせていただきます。

吹奏楽部最大のイベントは毎年夏に開催されるコンクールです。出場団体はその演奏レベルによって金・銀・銅の3グループに評価され、ほぼベストエイトに相当するものが金賞、そのうち上位4校が中国大会に出場できます。表彰式で「金賞ゴールド」とコールされるとその学校の生徒たちは「ワッツ」「やった」「キヤー」が入り混じった大歓声を上げて喜び、会場はちよつと異様な雰囲気になります。

私が着任してから6年間はずつと「銀賞」でした。毎年「今年こそは金賞を」と意気込んで演奏しても、表彰式では「下関商業高等学校、銀賞」とさびしくコールされるばかりです。5年目のコンクールが終わったときには「自分には指揮者としての能力がないからもうやめよう」と思いましたが、ほかに指導者はいませんので頑張るしかありません。

そのころ二人の女子部員が言った言葉が忘れられません。一人は副部長で、彼女にとって最後の大会直前に「一回でいいから表彰式で『金賞ゴールド』と呼ばれてみたいね。どんな気持ちがあるかねえ」と友達につぶやいたのが偶然わたしにも聞こえたのです。さらにその翌年には、もう一人から面と向かって厳しく言われました。「先生、もっと勉強して指揮を上手になしてください。私たちは先生が下手だから勝てません。隣の学校のT先生みたいに頑張ってほしい」と。

二人とも意地悪を言ったわけではありません。そのころには部員たちの技量は十分金賞レベルに達しており、妻にも「おとうさんの指揮が足を引っ張ってるよ」と言われていたのです。二人の言葉は部員全員の切実な思いであることは十分にわかっていましたので、重苦しく心に沈みました。

しかし、地道に重ねた努力は時間がかかっても力になるものです。7年目、市山和義部長の強力なリーダーシップのもとで挑んだコンクールでは、初めて部員たちと一体感のある会心の演奏ができました。特に自由曲の最後で市山のトランペットと油屋のピッコロが

びたつと重なったときの達成感は何となく重なり、感動は忘れられません。表彰式で期待通りに「金賞ゴールド」とコールされると部員たちは喜びに沸きかえりました。わたしは嬉しいというより「これで何とか部員たちの努力に報いることができた」とほっとしたのが実感です。

それ以降は途絶えることなく金賞常連校となって中国大会・全国大会にも出場し、山口県の公式使節として中国山東省への演奏旅行にも派遣されました。また、毎年春に開催するコンサートでは下関市民会館が満席となり、開場前に

はシーモールまで列ができるほどでした。こうした華やかな活動の基礎は未熟なわたしの指揮に耐えた先輩たちが築いてくれたものです。わたしは折に触れて二人の言葉を思い起こし、先輩たちに感謝しました。

さいごに下商14年間で学んだことを書いておきます。一つ「学校では教員が生徒を育てるだけでなく、教員も生徒に育ててもらっている」ということ。二つは「努力の成果はすぐには出ないが、諦めずに継続すれば大きく飛躍する。でもそれがいつ来るかはわからない」ということ。三つは「もてる力の70%しか努力しないで目標が達成されなければその努力は無に帰する。しかし苦しくてもプラス30%努力して目標を達成すればすべての努力が報われる」ということです。これがわたしの教員生活(というより人生)の基本になりました。下商で出会った生徒のみならず、そして多くのご迷惑をかけた先生方に心からお礼を申し上げますとともに、愛する下商のますますの発展を祈っています。



集合写真

※元下関西高校、早朝高校校長
前下関短期大学学長